

偽婚約のはずなのに、

元彼ヤンデレ弁護士の

孕ませ愛が止まりません

第一章

「僕たちまだ、別れていないよね」

「えっ」

黄瀬桜は驚きのあまり持っていた書類をバサバサッと落としてしまう。

「あっ、やだ」

「相変わらず、おつちよこちよいな」

ふっと笑みを零した彼は、しゃがみ込んで書類を拾い上げた。

そんなさりげない動作でさえ、神々しいほどに美しい。高級生地を使ったスーツに、鈍い光を放つ腕時計。先の尖った革靴は磨き上げられている。

くつきりとした二重のまぶたに、陰影をつくる長いまつ毛。彫刻のように筋のとおった鼻梁に、薄くて形のいい唇。明るめの髪をふわりと浮かせつつ、きりっとした男らしい眉をしている。

以前は年齢より若く見られがちだったけど、細身の身体にあわせてつくられた三つ揃いのスーツを着た途端、ぐっと大人の男の色気があふれだしていた。

この春に転職してきた、将来有望な若手弁護士として事務所内でも注目を浴びているのが省生

樹——桜の元カレである。

書庫内で樹に呼び止められた桜は、まるで初めて会ったような対応をしたところ——自分たちはまだ終わっていないと宣言された。

「ごめんなさい」

慌てつつもしゃがみこんで書類を拾っていると、樹の長い指がふとした拍子に桜の指先に触れた。そんな些細なことでもドキッと心臓が跳ねてしまうくらい、彼のことを忘れてない自分がいる。

「これで全部かな」

「……はい、ありがとうございます」

書類の順番はバラバラになってしまった。

ふう、と一息つくとも桜は渡された紙の束を揃えようとする。

けれど、先ほどの言葉が気になりすぎて、樹の顔を見ることができない。

なのに、樹に見られているような強い視線を感じてしまう。

トントン、と床を使つて書類を整え終えたところで、上から柔らかい声が落ちてきた。

「髪、しばってるんだ」

黒縁の伊達メガネをかけたまま、ふと見上げる。

桜はいつも、長い黒髪を頭の高い位置でお団子にしていた。目尻の下がった甘めの顔が、少しでも大人びて見えるように工夫している。

樹にしてみれば新鮮だったのだろう。以前は下ろしてばかりいたからだ。

「前の髪型も似合っていたけど、今もかわいい」

「あ、あの」

そんなことを言われても戸惑うばかりだ。樹と二人きりで話をするのも久しぶりなのに。

「じゃ、今夜はお祝いしようか」

「……はい？」

そこにはかつてと同じ爽やかな笑顔の樹がいる。事務所内ではクールな表情しかなかったのに、桜には優しい顔を見せている。

——でも、この人に近づいてはダメだから……

桜は口をギョッと引き締める。彼とは慣れ慣れしくしないと決めていた。

「省生先生、冗談はほどほどにしてくださいね？」

にっこりと余所行きよそへの顔を見せ、その場を離れようとすると——

「待って」

樹が二の腕をつかんで桜の歩みを止めた。距離が近づき、彼の熱を感じてトクリと心臓が跳ねる。

「まだ、返事を聞いていない」

「返事って」

「今夜のこと」

「だから、それは冗談ですよ？」

顔を引きつらせながらもにっこりとして答えると、彼は美麗な口角をくつと上げた。

「冗談でこんなこと言わないよ」

「でも、先生は赴任したばかりで忙しいのでは」

どうにかして断ろうと抵抗しても、彼はうつつすらと笑うばかりだ。

「桜に会えるなら、時間なんてどうにでもするよ。レストランはもう選んであるから、あとでメールするね」

「あの上！」

断ろうとしても彼はその隙を^{すき}与えずに立ち去っていく。

はあ、と軽く息を吐いた桜は彼の後ろ姿を眺めてしまう。身にまとう雰囲気は変わってしまったけれど、声はかつてと変わらない。

デスクに戻ったところで、桜は彼の残像をふりきるように首を振った。樹はあ言ったけれど、もう別れてからずいぶんとたっている。

これまで連絡の一つもなかったから、実際なんてしていない。

——なのに、どうしてあんなこと言うの？

再び樹に会うと思っていなかった。それも、弁護士になっているなんて。学生のころの彼は、裁判官になることを目指していたはずなのに。

二人の間には六年間の空白がある。

その間に樹は弁護士資格を取り、確実にキャリアを積んでいた。けれど、切り裂かれるような思いで別れを告げた原因は何一つ変わっていない。

むしろ今のほうが状況は悪くなっている。

——そうよ、どうあっても私は彼の恋人になんて、なれない。

書類を整えながら窓の外に広がる景色をふと眺める。高層階から見える空は少し色が薄くなっていた。

桜の働くセレスト総合法律事務所は、都心の大通りに面した建物の最上階にオフィスを構えている。在籍している弁護士の数はゆうに百名を超える大手の弁護士事務所だ。

そのためサポート業務を行うスタッフの数も多い。桜のような経理担当者もいれば、法的な業務を専門に補佐するパラリーガルや、秘書業務を行う人もいる。

省生樹弁護士……所長自らがヘッドハンティングしたと噂される彼は、主に多国籍企業のM&Aを行う企業案件を扱える人材として、破格の待遇で呼ばれたらしい。

まだ二十代なのに、パートナー弁護士の部下にあたるシニア・アソシエイト職についているのがその証拠だった。

経営者であり、実質事務所の弁護士のトップともいえるパートナー弁護士。噂では、樹はそのパートナー弁護士の候補だとも言われている。

そんな極上の男性と交際していたなんて知られると、厄介な^{やっかい}ことになりかねない。ただでさえ秘書業務をしている女性陣は、独身の男性弁護士を捕まえようと狙っている人が多いのに。

元カレの樹と同じオフィスで働くことになるなんて……桜は思いがけない状況に、戸惑うことし

かできなかった。

書庫から自席に戻ると、隣の席で総務の仕事をしている江藤里奈から声をかけられる。桜と目が合うと「あのね、高梨先生が部屋まで来て欲しいって。不機嫌そうだったよ」と伝えてくれた。

「……またかなあ」

「うーん、目をつけられちゃったかもね」

高梨綾香は民事を得意とする弁護士だ。背が高く顔のつくりも派手な美人で、いつもトップブランドの洗練された服を着ている。

けれど時折、苛立ちをそのままぶつけるため、事務員の間ではすこぶる評判が悪い。

それなのに弁護士、特にパートナーと言われる責任ある立場の人たちにはいい顔しか見せないため、実態は知られていない。

これまで彼女に目をつけられた職員は大抵、都内にある他の事務所に配置換えを希望する。それが叶えられない場合、退職する人もいた。

同情するように里奈は眉尻を下げた。これまでなるべく目立たないようにしていたのに、樹が事務所で働き始めてから注目を浴びてしまう。

独身で高身長、文句のつけようのないイケメンで優秀な弁護士。その彼がやたらと桜に近づき声をかける。大学が一緒だったことも彼が話してしまった。

さすがに交際していたことは広まっていないけれど、それも時間の問題だろう。

高梨弁護士は樹を気に入ったのか、彼が現れて以来桜を敵視している。こうして部屋呼び出され、文句を言われることが多くなった。

面倒なことを言われたいといいいけど……と思いつつ、桜は綾香の個室の扉を叩く。

すると――

「遅かったわね。すぐ来るようになって言っただけ、聞かなかった？」

里奈が教えてくれた通り、綾香は不機嫌な色を隠さない。心なしか声も低く、イライラしているのが丸わかりだ。

「申し訳ありませんでした」

立場は彼女のほうが上なので、桜は丁寧な言葉を下げた。お団子に結った髪が天井を向く。

「ねえ、あなた。今、省生先生と一緒に書庫で何をしていたの？」

「えっ」

驚いて顔を上げた途端、パシヤン、と冷たい液体がかかる。

「あら、ごめんなさい？ 手が滑ってしまっただわ」

綾香は手に持っていたコップの水を、桜の顔にかけていた。一体何が起こったのかわからず、桜は身体を強張らせる。

まさか、弁護士からこんなことをされるなんて。

桜がフリーズしたまま何も言えないのいいことに、綾香は調子づいた。

「あなたね、生意気なのよ。大学が同じとか聞いたけど、二人きりで話すなんて、ずるいじゃない」
——ずるい？ ずるいからって、水をかけるの？
あまりのことに肩が震えてしまう。

「とにかく、あなたはただの事務員なのよ。省生先生に近づくんなんて百年早いわ」

ぼた、ぼたと水を滴らせながら、桜は驚愕して綾香を見つめた。

「何よ、文句があるならいつでも訴えなさい。私に勝てるつもりなら、笑っちゃうけどね」

桜は悔しさのあまり奥歯をグツと噛みしめる。

確かに彼女は民事であれば抜群の成績だ。扱う金額は大きくないが、特に相談件数が一番多い不倫や離婚には強い。事務所内でも重宝されている。

そんな人に一介の事務員が文句を言うことなんて……できなかった。

桜は膝を小刻みに震わせながら、やつとのことので声を出す。

「あの、ご用件は」

「もういいわ」

綾香は桜に水をかけたことで気が済んだのか、すぐに出ていけと言う。

「……失礼します」

水をかけられても何も言えず、桜は部屋を後にした。そのままデスクには戻らず、更衣室へ向かう。万一の時に備えて着替えをロッカーに入れていた。

誰もいない更衣室で、桜は口を手でおさえる。

何も言い返せないで、水をかけられたままなのが悔しい。でも、相手は弁護士だからどうしようもない。
タオルで水を拭きとり、化粧をなおす。樹に再会さえしなければ、そして彼が桜に近寄らなければ、こんなことにはならなかったのに。

これまでは彼を避けていたけれど、一度しっかりと話をするほうがいいだろう。過去のことは過去として、今は違う道を歩いているのだから。
気が重くなりながら、桜は自分のデスクへ戻るのだった。

桜は大学生の時、とある理由で会計の勉強を始めた。おつちよこちよいなところのある自分が、実は数字に強いことに気がついた。

普段学んでいる法学部の知識を生かせるように、法律事務所で働こうと事務職の採用試験を受けた。最終的に桜は、大手のセレスト総合法律事務所の経理として採用された。

働き始めて実感するが、経理をする人材がいなければ、この事務所は回らない。お金は血液のようなものだ。流し続けないと死んでしまう。

それにセレスト総合法律事務所は多国籍企業相手の案件もあるため、海外の銀行とのやり取りも多い。

新興国にある企業からの送金には特に注意を払わないと、マネーロンダリングの疑いをかけられかねない。

おかげで予想していた以上に英語を使う機会があった。学生のころから好きだった語学を活かすことができ、やりがいを感じている。

給料も福利厚生もしっかりしているこの職場を、離れるつもりはない。だから、樹にはこれ以上近寄って欲しくないけれど……

省生弁護士から社用メールに届いたメッセージは、終業後にロビーで待っていると書かれていた。——こんなことされると、また目立つちゃう……！

金曜日の夜にロビーで待ち合わせるなんて、職場の人に見られてしまうのに。桜は頭を抱えてしまっただった。

着替え用に置いていた白のブラウスは、急な葬儀でも着られるようにシンプルなものだった。華やかなスカートでもあれば印象が変わるけど、そんな気の利いたものは置いてない。

ベージュ色の巻きスカートは無事だった。なのでそのまま着ているけれど、いつもに増して地味な服装だ。

——スカートに柄でもついてれば、もうちょっとかわいかったのに……

普段からアクセサリーは着けていない。髪までなおす時間はないので、お団子ヘアはそのままにしてある。

黒縁メガネは外しておいた。もう彼には伊達だとバレしていることだし。

事務所の入っている複合ビルの一階ロビーは、広い空間になっている。警備員の立つ自動ドア近

くで待っていると、同じフロアで働く男性職員に声をかけられた。

「あれ、黄瀬さん。誰か待ってるの？」

「いえ、ちょっと」

曖昧に答えると、彼はぐいっと身体を近づけた。

「眼鏡……外すと雰囲気が違うね。そのほうがすごくいいよ」

「あ、ありがとうございます」

褒められて嬉しいはずが、なぜか嫌な視線を感じてしまう。桜の苦手な、男の視線だ。

「もしよかったら、今夜一緒に夕食とかどう？ 近くにある美味しい店、知っているんだ」

「えっと、それは……」

約束があるからと言って断ればいい。けれど、その約束の相手が樹だと知られたくない。

どう言おうかと戸惑っていると、タイミングがいいのか悪いのか本人が登場する。

「悪いけど、君。どっか行ってくれないかな」

スーツ姿で笑顔の樹が近づいて、桜の隣に立った。思わずガチンと身体が固まる。

「うえっ、しよ、省生先生っ？」

失礼なことを言っているのに爽やかに笑う樹に、男性はただ目を丸くするしかなかった。

さらに樹は、桜をいかにも大切な恋人のように肩を抱き寄せる。

「これから彼女の予定は僕が全部予約済みだから、もう誘うのは止めてくれる？」

「はっ、はいっ」

「ピキン、と直立不動になった彼は、樹の言葉を聞いて「やっぱり噂は本当だったんだ」と呟いた。噂って、何の噂？」

聞いて確かめたいけれど、男性は樹が笑顔でありつつも目が笑っていないのを見て、そそくさと去っていく。

その後ろ姿を見ながら、樹は「思っていたより害虫が多いな」と呟いた。

「あの、省生先生。……ち、近づきます」

いつまでも肩を抱いている彼に、桜は控えめながら訴える。すると「ああ、こっちのほうが進みますよ」と言いつつ桜の手をとった。

——違う、そうじゃなくて……！

近すぎるんです！と言いたいけれど、樹は颯爽と外に向かって歩きだす。

「タクシーでいいかな」

「あのっ、お仕事はよかったですか？」

「まだ着任して間もないから、クライアントはそれほど抱えてないよ」

機嫌をよくした彼は、大通りに出るとすぐに流れてきたタクシーを止めた。

「この店まで」

スマートフォン画面を運転手に見せると、後部座席に二人で座る。

そしてすぐに指を絡めるように手を繋かれる。離そうとしても、許さないとばかりに力を入れてきた。

「省生先生、手、離してください」

「なんだか他人行儀だね。樹、って以前のように呼んでよ」

「……そんなこと、できません」

本気で嫌がれば、きつと彼は手を離してくれる。

けれど、桜の心のどこかが樹の手の温もりを喜んでいいる。それを察しているのか、彼は手を握りしめたままだった。

「レストラン、桜が好きそうなところにしておいたよ」

「……ありがとうございます」

用意周到な彼のことだから、やはり予約をしていた。それを断る勇氣はない。

タクシーが指定された場所に到着すると、スマートに支払いを終えた彼が先導する。

ビルの最上階にある、夜景の見えるレストラン。この服装でよかったのか心配だけど、今日はいろいろあったから仕方がない。

「綺麗」

案内された半個室の席に座ると、東京タワーがオレンジ色に光っているの見える。いかにもデートで使われそうなレストランだ。

「気に入ってもらえてよかった。学生のころは、こうした店に来たことなかったよね」

「……そうでしたね」

樹と行ったレストランといえば、近所にあったファミリーレストランか、駅前にあった焼き鳥が

美味しいと評判の居酒屋だった。

彼の部屋へ行くようになってからは、自炊をしていた。桜は料理をするのが好きだったし、樹もなかなかの腕前だった。

「今夜は二人の再会に乾杯しようか」

「……それはっ」

——乾杯なんて、喜んでは……いけないのに。

戸惑いが顔に出ってしまったのだろう、樹は続けて語りかけた。

「とりあえず、またこうして二人で会えて……僕は嬉しい。桜はどう？」

「どう、と言われても」

「驚いたよね」

「それは、もう」

すると二人の席にフルーツグラスに入ったシャンパンが一つ届けられる。それを持ち上げると、樹は「乾杯」と言っただけ上にあげた。

桜はお酒ではなくオレンジジュースを頼んでいる。

「驚かせたかったんだ」

グラスから一口飲んだ彼は、ゆっくりと話し始める。

「どういこと……ですか」

「君があ的事务所で働いていること、聞いていたから」

誰から伝わったのだろう。法学部の時の知り合いから聞いたのだろうか。

「だからセレストから声がかかった時、ここだと思っただけ。仕事内容も魅力的だったし。何よりもこれで、桜に堂々と会えると思っただけ」

「えっ、それって」

どういう意味ですか、と聞こうとしたところで前菜が運ばれてくる。緑と黄色の色鮮やかなアスパラのチーズ巻だ。

「とりあえず、料理を楽しもうか。僕もこのコースは初めてなんだ」

朗らかに笑った樹は「美味しそうな前菜だね」と言いフォークを持った。

桜は戸惑いつつも、目の前にある料理に目を留める。採れたてを調理したのだろう、口を含むとアスパラ特有の爽やかな香りが広がった。

「……甘い」

「ほんとだ、新鮮なアスパラって甘いね」

初めての豪華なコース料理に感動しつつ、樹と過ごす時間が穏やかに流れていく。メインに出てきた牛ほほ肉の赤ワイン煮込みに舌鼓を打つ。

最後にコーヒート共に、デザートのケーキが配られた。

桜は今こそ伝えようと、ぐっと奥歯を噛みしめる。

「省生先生。その、職場ではもう、話しかけるのを控えていただけますか」

「……どうして？」

「注目されている省生先生と知り合いだとわかると、事務所内で私……いろいろと困るんです」
「困るって、具体的には？」

「今日も水をかけられました。……と、言えたらいいのに。」

「でも、そんなことは軽々しく言えない。高梨弁護士の告げ口のようなことをすると仕返しが怖い。」

「悪意を向けられます」

「……」

「そんなの、もう、耐えられない」

桜は思わず俯うつむいてしまう。過去に、親のことでひどく悪意ある言葉を投げつけられたことがある。その時を思い出してしまい、うっすらと涙をためてしまった。

「だから……は、離れて、ください」

最後のほうは涙声になってしまふ。ここまで伝えれば、流石さすがに樹もわかってくれるだろう。とにかく彼に好意を向けられると困ってしまう。

「桜……辛辛いかった？」

「……はい」

「わかった。それなら、職場で君に声をかけないようにする」

ハツとして顔を上げる。すると樹と目が合った。

「でも、その代わり僕と連絡がとれるようにして。SNSとか、ブロックしているよね」

「……はい」

「解除すること」

有無を言わさぬ勢いで迫られ、桜はしぶしぶスマートフォンを取り出した。

「連絡先って、以前そのままですか？」

「そうだよ。桜がいつでも連絡とれるように、変えていない」

「っ」

「……どうして、そんなことっ……」

これでは、今まで桜のことを待っていたようなものだ。ざわりと心臓が音を立てる。

そうして戸惑いながらもブロックを解いていく。社用携帯電話も、と言われて新しい番号まで登録してしまう。

「よし。これでちょっと安心した」

「あの」

「職場では不必要に声をかけないけど、連絡は無視しないように。返事をくれなかったら、桜の席まで行くからね」

「……っ、はい」

「あと、その先生呼び」

「……はい」

「さっき言ったよね」

樹から有無を言わさぬ圧を感じる。ここまで言われると、仕方がないとばかりに桜は頷うなづいた。

「樹……先輩」

「ん。まあ、今はそれでいいよ。職場はともかく、プライベートでも先生なんて、呼ばれたくないからもしかすると、余計マズイことになったのでは？」と黙ってしまいが、後の祭りだ。

途端に上機嫌となった彼は、「デザートも美味しそうだよ」と桜に食べるよう促した。なぜか獣に追い詰められたウサギのような気分になる。

樹が一瞬見せた鋭い目つきに、次に食べられるのは自分かもしれないと、ふと桜は思ってしまうのだった。

家まで送ると言われ、固辞したけれどタクシーに乗せられた。

そうしてアパートの前で降りてもらおう。以前家族と住んでいた地域にある、古いつくりの建物だ。セキユリテイなんて何もないけれど、今の自分が支払える家賃で都内となると、こうした物件しかない。

彼は桜が部屋に入るまで見届けるように立っていた。明かりをつけたところで窓から外を見ると、樹が軽く手を振る。

携帯電話で「もう大丈夫です。今日のご馳走様でした」とメッセージを送ると、「おやすみ」とかわいいキャラクターのアイコンが返ってきた。

二人がつき合っていたところに桜が大好きだった、黄色い犬のキャラクターだ。まだ彼は覚えていてくれた。

しばらくすると、待たせていたタクシーに乗り、樹は帰っていく。彼は以前も住んでいた、あの部屋にまだいると言っていた。

久しぶりに樹といっぱい話をしたけれど——最後まで聞けなかったことがある。

——どうして、裁判官にならなかつたのだろう……
一番知りたかつたことだ。

だけど彼の事情を聞くと、『近づかないで』と伝える決断が鈍りそうに聞けなかつた。

今、樹は多国籍企業の合併や、知的財産権を扱うセクションにいる。

そうした仕事は、裁判官の仕事とは大きく違う。扱う金額は膨大だし、それに伴い収入も多い。彼が本当にやりたかつたこと、なのかもしれない。

まさか、桜の事情をおもんばかつて裁判官になるのを辞めた……とか。

いや、彼はそんなことで自分の将来を決めることはない、と信じてたいけれど。

——樹先輩、優しかつたな……

連絡先も変わっていないかつた。

それも桜がいつでも連絡できるためだと言っていた。さらに今日の口ぶりでは、まるで桜を追いかけて今の事務所転職したように聞こえる。

どうして、そこまで桜のことを求めるのだろう。

もう、自分たちは別れて六年もたつているのに。

その夜、桜は布団に入つてもすぐには眠れなかつた。まぶたの裏には、樹の笑顔が貼りついては

がすることができなかった。

それから樹は、約束通り職場で桜に話しかけなくなる。すれ違っても視線を重ねることもない。普段の仕事で接点はないため、姿を見かけない日もあった。

その代わり、一日が終わる時刻になると頻繁にメッセージが届くようになる。

『今日も桜はかわいかったね』

『髪を下ろしているのも好きだけど、今の髪型も好きだ』

『伊達メガネで素顔を隠し続けてください。君の寝顔も素顔も見せるのは僕だけにして』
ともすれば迷惑な元カレになりかねない。

けれど、それを嫌だと思えない桜がいる。彼はきつと、この微妙な気持ちを嗅ぎ取っているのだろう。本当に嫌がることは、しない人だから。

読んだらすぐに、アイコンで返事をしている。『おやすみなさい』とか、『もう眠い』とか。

時には『ストップ』とか『嫌いになっちゃうよ?』とか、かわいらしいキャラクターに気持ちを代弁してもらうと、言いくいことでも伝えやすかった。

彼のほうも、桜の好きそうなキャラクターを選んで『嫌わないで』と伝えてくる。

メッセージで近況を伝えあうけれど、実際に二人で会うことはなかった。それでも一日流れた噂話は、消えることなくくすぶり続けていた。

ある日、桜が経理担当として新規顧客数と着手金の計算をしていると、合計があわない。

それも高梨弁護士が担当のものだった。桜は背中に嫌な汗をかきつつも、確認のため彼女の部屋を訪れる。

「先生、着手金のこと少し、お時間よろしいでしょうか」

「はあ? あなた、何なの?」

彼女は桜の顔を見た途端、不機嫌そうに片方の眉を上げた。

「実は先生の新規クライアントの数と、着手金の合計があっていませんでした」

クライアントが正式に依頼すると決めた時に支払う『相談着手金』。基本的には振り込んでもらうけれど、現金を直接弁護士に渡したい人が時折いる。

そうした場合、弁護士が一旦現金を受け取った後、経理担当へ渡し、それを銀行へ持って行き入金する。

ひと手間かかるけれど、依頼人の中にはどうしても手渡したい人がいる。

依頼人の気持ちに寄り添える一方で、不正やミスも起こりかねない。そのため、なるべく現金は扱わない方針だけど、綾香はどうやら、気にしないタイプの弁護士だった。

「あなた、もしかして私を疑っているの?」

「そういうわけではありませんっ」

「記録していないあなたのミスでしょ。ほんと、しっかり仕事してもらわないと困るわね」

「申し訳ありませんっ」

桜は頭を下げて謝った。

けれどその一方で、こういうケースの場合、綾香がクライアントから預かった現金を、経理に渡していない可能性もある。

何度も銀行に入金した額と日付を確認して、パソコン内の記録を照合した。

だが該当しそうな入金は見当たらなかった。

「すみませんが、一度机周りを確認していただけないでしょうか」

「はあ？ こっちは忙しいのよ。机なんかを見てどうするのよ」

「あの、着手金が先生の手元に残ってないか、確認していただきたいのですが……」

経理としては正当な手順だ。記録に残っていない場合は弁護士デスク周りを探す。うっかりして、経理に渡しそびれる弁護士も少なからずいるからだ。

しかし、彼女はその提案を却下した。

「そもそもね、私。あなたみたいな人にお金を扱って欲しくないのよ」

「先生？ どういうことですか？」

「だって、あなた。貧乏くさいじゃない。このオフィスの女性はお洒落なことで有名なのに、野暮^ぼつたい服装ばかりで。そのブラウス、昨日も同じものを着ていたんじゃないの？」

「っ、それはっ」

桜は反論できなかった。貧乏くさいどころか、本当に貧乏だからだ。

ブラウスが重なったのは、安売りセールで三枚セットを買ったからだ。無難な白いブラウスだが

ら、大丈夫だと思っていたけれど、気づかれている。

——悔しい。けれど、言い返せない。

爪がくいこんで痛いくらいに、ぐっと拳^{こぶし}を握りしめる。

「……すみません」

「うちの会社、そんなに給料悪くないはずでしょ。なのにそんなにもみすぼらしいなんて。みんな気がついてと言わないだけで、陰で笑ってるわよ？」

綾香は顎^{あご}をツンと上に向けた。

「もしかしてあなた、変なところに借金しているんじゃないの？」

「……」

借金はあるけれど、変なところからではない。それに借りた理由も自分が大学を卒業するためだから、そんなにおかしくないはずだ。

けれど、借金のことを伝えたくはない。

「ほんつと、お金に困ってる人が経理だなんて、怖いわね」

桜は深く頭を下げた。これ以上反論すれば、綾香を怒らせることは経験上知っている。

自分の手に負えない以上、もう着手金のことは経理部長に任せようと、桜はその場を離れることにした。

綾香の部屋を出た途端、桜ははーっと深く息を吐く。

——辞めろ、って言われなくてよかった。

彼女がそう言つて騒ぐと、部長なんかは嫌がるだろう。そして最悪なことに、本当に辞職に追い込まれることがあるからだ。

嫌味攻撃に傷ついた桜は、無力感に脱力する。けれどその夜、更なる不幸が彼女に降りかかった。

駅からの道をとぼとぼと歩いていく。駅から遠いうえに、電灯が切れかかつて暗いところもある。暗い気持ちを抱えながら歩いていくと、桜は異変に気がついた。

——え、どうして？

桜は呆然として固まった。

雨が降っているわけでもないのに、部屋の前の廊下が濡れている。

あれ、おかしいなと思つたところで……

「雨もり？」

自分の部屋の扉を開けると、目の前の床が水浸びたになつている。天井から水が降っている。それも大量に降つていた。

「すみませーん、この部屋の住人の方ですか？」

「あ……はい」

不動産会社の社員を名乗る男性が話しかけてくる。

どうやら、上の階の部屋の水道管が破裂し、水漏れしたようだ。発見が遅くなり、桜の部屋は大

量の水を受けてしまったという。

布団も何もかもが濡れている。ハンガーにかけてあつた服だけは何とか無事だが、タンズ代わりに使つていたダンボール箱にも水がかかり、中の衣類がぐっしょりと湿つている。

「どうしよう……」

頭の中が真っ白になる。

弁償とかあるんだろうか。とりあえず今夜はどうしよう。この水浸しの部屋で眠れるだろうか。

両親に仕送りをして、弟の学費を払うと生活に余裕はない。さらに今日は給料日前で、来期分の学費を送金したばかりだから、貯金残高はゼロに近い。

するとその時、桜のスマートフォンが鳴つた。

誰だろう、と画面を見ると樹の名前が表示される。

彼からの電話はすぐに出る約束だつた。

呆然ぼうぜんとしつつも通話を開始した桜は「はい、はい」と空返事をくり返す。

『……桜？ どうした？ なにかあつたのか？』

声の調子から異変を感じたのか、樹が問いかける。

けれど、どこまで話していいのかわからない。

「え、あの……」

戸惑つていると、不動産会社の男性から声をかけられた。

「すみませーん、水漏れの具合ですが、一度部屋の中を確認させてもらつてもいいですか？」

「あ、はい」

返事をしたところで、樹との会話を切ろうとすると彼が叫ぶ。

『桜！ 水漏れってどういうことだ？』

「えっと、あの。ごめんなさい、私もよくわからないの
すると再び声がかかる。

「黄瀬さん？ 一緒に立ち会っていただけますか？」

「はっ、はい。今行きます！」

桜は「ごめんなさい」と伝え通話終了のボタンを急いで押すと、呼ばれたほうへ向かう。

電話の向こう側で『待つてる、今行くから！』という叫び声は聞こえなかった。

現場の確認をしたところで、「ここで寝るのは無理ですね」と言われてしまう。

確かに床も寝具も濡れている。電気製品も使えそうにない。

後日改めて賠償金額を確定するので、それまでの費用を立て替えておいてください、とサラッと伝えられた。

「あの、今夜泊まるどころとか、どうしたらいいのでしょうか」

「あ、後で請求してください」

——どうしよう、請求って言われても……お金、ほとんどないのに。
会社に着ていく服も濡れている。

洗濯機も使えない。クリーニングに出すにもそのお金もない。クレジットカードはお金の管理が難しくなるので、持っていないかった。

困りきつているところへ、一台のタクシーが止まる。するとそこから樹が降りてくるのが目に入った。まだ仕事の途中だったのか、スーツ姿だ。

「え、樹先輩？」

つかつかと歩いてくると、彼は桜に「待たせたな」と言い傍に立った。

「先輩っ」

心細かった桜は一気に安堵する。

何も解決していないのに、彼がいるだけで安心感があつた。樹は「僕が来たから、もう大丈夫だ」と言い、桜の頭を優しく撫でる。

そうして桜が落ち着くと、彼はすぐに不動産会社の担当者に向きなおった。

「私は黄瀬桜さんの婚約者で、弁護士をしている省生という者です。部屋が水漏れしたということですが、説明していただけますか？」

いきなり婚約者と名乗ったことに驚くけれど、樹は桜に向かって「しっ」と口元に人差し指を立てた。

彼が担当者に名刺を渡すと、樹が弁護士と知り、担当者はしどろもどろになりながらバッタのように頭を下げ始めた。

「それでは、今後の費用請求はこちらでよろしいですね」

「はっ、はい！ 早急に対応させていただきます」

桜一人の場合と言っていることが違う。弁護士という名刺一枚で、態度を豹変ひょうへんさせていた。

「よろしければ、会社のほうでホテルを準備させていただきますが」

「それはいい。彼女は私のところに連れて行くから」

「あつ、そうですね！ わかりました」

えっ、と思っただけ口を挟む間もなく会話は流れていく。

気がついた時には確認作業が終わり、担当者は逃げるように去っていった。

桜に向き合った樹は、「貴重品を確認して」と言う。

「あ……そうです、ね」

心配して来てくれたことにお礼を言う間もなく、桜は再び部屋の中に戻る。懐中電灯代わりにスマートフォンを使っていると、充電がなくなりそうだった。

元々、物をあまり持っていない。

それに貴重品といっても、通帳と印鑑を持ち出せば後はなんだろう？ というくらいだ。

「部屋の鍵はかかるから……締めておけば、泥棒は入れないかなあ」

「持ち出す物はそれだけ？」

「うん、とりあえず明日また明るい時に来るから」

週末でよかった。仕事を休まないで済む。服も土日の間に少しでも乾けば、事務所に着ていくことはできるだろう。

問題は今夜の宿だった。残り少ない現金で、どうやって過ごしたらいいのか。

「樹先輩。ありがとうございます。とりあえず、どこか泊まれるホテルを探します」

「僕の部屋に来ればいいよ」

「……はい？」

桜はあんぐりと口を開けてしまう。

さつきも担当者にそう言っていたけれど、本気だったのか。

「以前の部屋、あれからずっと僕が使っているんだ。だから部屋が余っているのは知ってるだろう？」

桜一人くらい増えても大丈夫だから

「そ、それはわかりますが、先輩の部屋だなんて」

「嫌なのか？」

「い、嫌っていうか、普通、ありえませんか？」

桜の認識では、樹とつき合っていない。

好きだと言われているが、交際することを了解していない。けれど、樹はそれでは納得しなかった。

「何でだめなんだ。今日泊まる場所に困っているから、部屋を貸すだけだよ」

「でも」

「……何もしない。君が嫌がることはしないから。桜、こんな時くらい、僕を頼って欲しい」
こちらが頼る側なのに、「頼って欲しい」と懇願してくる。

そこまで言われると、一晩くらいなら……と、桜はうんと頷いた。

全く知らないところではないし、樹の性格上、桜の同意なく手を出すことはないだろう。

「では、今夜だけ……お世話になります」

「うん、でも今夜だけなんて言わないでいいよ。まあ、もう離すつもりはないけど」

樹は桜の手をぎゅうっと握りしめた。

——離すつもりはないって……手、手のことだよね？

樹の執着ぶりに寒気がしてしまう。彼は嬉しそうに尻尾を下げながら「ずっといいから」と気持ちを伝えてくる。

——は、早まった……かな？

と思うけれど、樹の部屋に泊まらせてもらえるのは非常に助かる。

弟も東京の大学に通っているけれど、学生寮住まいだから泊まることはできない。他に頼れるような友達もいなかった。

二人を乗せたタクシーは爽快に夜の東京を走っていく。

こんなことがなければ、彼の部屋に足を向けることはなかっただろう。見覚えのあるエントランスに、エレベーター。玄関扉を開けるための番号も変わっていない。

扉を開けると、懐かしい樹の匂いがする。爽やかな、柑橘系かんきつの香りに甘さが加わっている匂いだ。

——またこの部屋に、来ちゃった……

香りに引きずられるように、桜は当時のことを思い出していた。

第二章

省生樹と出会ったのは、桜が大学に入学してすぐのことだった。

中学、高校と女子校へ通い受験勉強に明け暮れた結果、難関私立大学の法学部へ入学することができた。

桜としては、先生に勧められるままお試し受験したところ、実力以上の力を発揮し合格してしまった感覚が強い。

当初は喜んだものの、入学してみると周囲は法曹界ほうそうを目指す人たちばかり。

それも弁護士だけでなく、裁判官や検察官けんさつ志望者もいて——入学して以来、ついていくのに精いっぱいだった。

——とにかく、授業料も高いから留年だけは避けないと……

父親は都内にある会社で働き、母親は近所のスーパーでレジ打ちのパートをしている。少し年の離れた生意気な弟は小学六年生になったばかりだ。

ごくごく一般的な家庭で育ったけれど、学費の支払いのために奨学金を借りている。

たとえ法曹界に行けなくても、大学の知名度があるから卒業後の就職先は何とかなるだろう。とにかく留年しないように、勉強をがんばるしかない。

空いた時間に図書館へ行き、課題やレポートに取り組み日々を送っている。休日はバイトをしているため、華やかな女子大生とはほど遠い生活だ。

一度も染めたことのない髪は、緩やかにウェーブをかけている。前髪があると子どもっぽく見えるから、伸ばし始めたところだ。

お餅のように白い肌を、女子校時代は「ぶにぶにしてる」と半分からかわれたものだった。

ぱっちりとした二重に、大きめの黒目。目尻が少し垂れ気味だから、狸顔だと言われたこともある。体形は普通なのに、胸だけが少し大きい。

でもそれはわからないように、だぼつとした服を着るようになっていた。

自分としては普通の容姿だと思うけれど、時折男性からジッと見つめられることが増えている。

そうした視線に慣れていないから、怖いとしか感じない。

図書館で勉強を続けていると、カタン、と音がする。

「ここ、空いてる？」

「あ、はい。どうぞ」

声をかけられ、桜は隣のイスにのせていた鞆かばんを動かした。集中していたから気がつかなかったが、周囲を見回すと、ほとんどの席が埋まっている。

男性にしては声のトーンが柔らかい。女子校にいたため、どうしても男らしい人が苦手だけれど、隣の席に座る彼の声は心地よかった。

気になって隣を見ると、とんでもなく美形の男子学生が座っている。甘めの整った顔立ちに、明

るい色の髪。

服装は派手過ぎず、落ちついた色合いのシャツを着ている。ジーンズに黒の靴をあわせ、いたって普通の学生だ。

でも、横顔だけでも人を惹きつけるアイドルのような容姿をしている。

——すごい、こんなにもかっこいい人がいたなんて……！

まるでドラマに出ていた、人気俳優のように整った顔をしている。

つい見入ってしまったのか、桜の視線に気がついた彼がはにかんだ表情を見せた。

「すみません」

パッと顔を伏せ、彼だけに聞こえるような小さな声で謝る。きつと見つめられることに慣れているのだろう。彼は気にすることなく本を開いている。

桜も気持ちを落ち着けるように呼吸をして、何もなかったかのように勉強を続けたけれど……なぜかそわそわとしてしまい、集中が途切れがちになっていた。

図書館の席は自由だけれど、頻繁に行くようになるとお気に入りの場所ができる。桜は窓際の明るい席に座ることが多かった。

今日も隣には、あの時のイケメンがいる。

彼が読んでいるのは法学関係の本ばかりだから、同じ学部の人だろう。時折、司法試験対策をしているから先輩のようだ。

図書館で勉強する学生は、それほど多くない。通っているうちに同じ学生ばかりを見るようになる。イケメンの先輩もその一人だ。それも桜のお気に入り席の近くが彼の定席のようだった。

「ここ、いいかな」

「はい」

とりとめのないちよつとした会話。一言、二言交わすだけの関係が続いていた。

そんなある日、いつものように彼が桜の隣に座っていた時だった。

「あ」

立ち上がる時にうっかり、鞆があたって隣に座る彼の筆箱を落としてしまった。カランと音をたてて中身が床に広がっていく。

「ごめんなさいっ」

咄嗟とつさに拾い上げようとしゃがみ込むと、彼もすぐにイスを引いた。

今時珍しく、彼は鉛筆を使うようだ。落ちた拍子に折れてしまった芯が見える。彼と一緒に拾い集めたところで、「すみませんでした」と頭を下げた。

「あの、代わりの鉛筆を用意するので、ちよつと待っていてくれますか？」

「鉛筆は他にもあるから大丈夫だよ」

「でも、それじゃ……」

「だったら、コーヒーの一杯でも奢おごってくれる？」

桜にしか聞こえないくらいの声で、彼がささやいた。そのくらいのことなら、と立ち上がるとなぜか彼も一緒に立ち上がる。

「コーヒーなら私、自販機で買ってきますよ？」

「えーと、そうじゃなくて……とりあえず、外に行こうか」

荷物を鞆に入れた彼と一緒に、図書館の外へ行く。大学の建物に併設されているから、広いロビーは開放感があった。ようやく普通に声を出せるとあって、ホッとする。

桜は隣に立つ彼に再び頭を下げた。

「あの……鉛筆、折ってしまいすみませんでした」

「それは気にしないでいいよ。むしろこうして、話すきっかけになって嬉しいっていうか」
「……？」

首を傾げて彼を見上げる。座っている時にはわからなかったが、かなりの高身長だ。日本人女性の平均的な身長たかさの桜が見上げるくらいだから、百八十センチは超えているかもしれない。

「もしよかったら、この後一緒にコーヒーを飲む時間ある？」

「あっ、でも私。次のクラスがもうすぐ始まるから」

「だったら、連絡先を教えてくださいませんか」

「え、あ、はい」

ませている弟からは、連絡先を気軽に男に伝えるなど言われている。でも今回は特別だと思い、桜はスマートフォンを取り出した。

彼も同じようにしてアプリを起動する。ショートメッセージを気軽にやり取りできるものだった。「やった、連絡先ゲットだ」

「え？」

「僕は省生樹、法学部の三年。君は確か」

「はい、同じ法学部の一年で、黄瀬桜です」

イツキというアイコンを確認し終えると、画面から目を離して正面にいる樹を見上げた。

——わっ、やっぱりすごいイケメン……！

外からの日差しを受けて輝いている。眩しいほどの笑顔は、とても素敵で——

トクン、と桜の心臓が跳ねる。

「今度、連絡してもいい？」

「……はい」

その日から、桜の心の中に樹が入り込む。たわいない挨拶を毎日SNSで交わすようになり、図書館では席が空いていても隣同士で座るようになる。

しばらくして一緒にコーヒーを飲んだその日、彼から告白された。「いつも図書館にいる桜さんのことが気になっていた」と。

「僕とつき合ってくれる？」

「あの、それって、男女交際的なおつき合いですか？」

「そうなるかな」

微笑む彼が眩しかった。

最初は樹の外見に惹かれたけれど——今はもう、彼の優しさと生真面目さを知っている。毎日来るメッセージに胸をときめかせていた。

でもその一方で、自分のどこを気に入ったのか疑問に思う。

桜はこれまで、男性から告白されたことはおろか、交際したこともない。恋愛の経験がなく自信がなかった。

「でも、どうして私なんですか？」

すると樹ははにかんだ笑顔を見せる。

「実はさ、こうして告白するのは、桜さんが初めてなんだ。だから、上手く言えないんだけど……雰囲気が好きで、メッセージをやり取りするようになったら、楽しいっていうか。自分を飾らないでいられる感じが、心地よくて」

「……えっと」

なんだかとてもないことを言われているような気がして、顔に血が上ってしまふ。どう答えようかと悩んでいると、樹はさらに言葉を重ねた。

「あ！もちろんそれだけじゃないよ、会えば会うほど、桜さんがかわいく見えて困るから、僕のものにしておきたいっていうか。離したくないっていうか……そういう感じなんだけど、どうかな」

「本当に私で、いいんですか？」

「桜さんが好きなんだ。僕の恋人に……なってくれる？」

樹に真剣な眼差しで告白され、胸の奥が嬉しさでいっぱいになる。
桜はすぐに「はい」と答えた。

こうして彼氏、彼女の関係になった二人は……手を繋いで駅までの道を歩く。桜の心臓はあり得ないほどに、トクトクと早打ちするのだった。

初めてのデートは大学の隣にある美術館へ行った。大学生のデートではそこへ行くのが定番だったからだ。

でもどんな展示物があったのか、実は覚えていない。

彼も同じだった気がする。終始「いいね」としか言っていなかった。

美術館の隣には公園が広がっている。その広い緑地帯を歩いているだけで、ドキドキした。

手が触れた時はそこが熱くなった気がした。それでも友達から聞いていた体験談よりも、彼は慎重だった。つき合いはじめたら、すぐに手を出されるよ、と聞いていたのに、何もなし。

軽々しく触れてこないところも、誠実さが感じられて好きになる。

男性に慣れていない桜のことを、大切にしてくれているようで安心した。

それでも、荷物を持ってくれる時や、さりげなく車道側を歩いてくれる気配を感じると、女友達とは違う、男性を感じる。

もう少し進んでくれてもいいのにな……と思わなくもない。

けれど彼は先輩で、大人で、こんなにもかっこいい。きつと経験もたくさんあるだろう。

そうした中で自分を選んでくれたのだから、桜のほうからはとても触れることができない。そんな想いも、伝えられなかった。

それなのにととうとう、何度めかのデートをした後で桜は樹の部屋に呼ばれた。

図書館で勉強するのもいいけれど、わからないところがあれば教えられるから、と言われ断る理由はない。ドキドキするだけだ。

過保護気味な両親には「友達の家で勉強する」とだけ伝えていた。

樹の家族は転勤族のため、今は東京にいないという。そのため彼は、両親が購入したマンションに住んでいるとの話だった。

初めて彼の部屋に足を踏み入れた桜は驚いてしまう。

高級住宅街と言われる地域の駅に直結したマンション。一人暮らしには大きめの2LDKで、床は白いタイプのフローリング。

きつと購入価格は高額だったに違いない。

桜は自分の家とつい比べてしまう。下町と言われる地域のアパートで、最寄りの駅まで歩いて二十分ほどかかる。

就職したら実家を出て一人暮らしを考えていた。それでも、樹の住むようなマンションは夢のまた夢だろう。

「樹先輩のご両親って、何をされているんですか？」

「あんまり言っていないけど、実は裁判官なんだ」

「えっ」

中立を求められる立場だから、あまり周囲には言っていないという。驚いた桜が口を手でおおうと、目を細めた樹はゆっくりと口を開く。

「両親からは、僕も同じように裁判官になって欲しいと言われていてね」

「だから樹先輩も、目指しているの？」

「うん、まあ……そうなるかな」

司法試験を目指す段階で、多くの学生は弁護士か検察官か、それとも裁判官になりたいのかを決めている。

中でも裁判官は、試験に合格するだけではなく司法の番人として人格までも審査される。

法曹界では一番厳しい道とも言えた。

「うまくすれば弁護士のほうが収入も高いし、プライベートも関係ないから楽だけどね」

「……志があるって、すごいです」

桜はただただ感心するしかなかった。勉強を見てもらうようになり、自分がいかに落ちこぼれなのか、樹がとてつもなく優秀なのかを思い知らされる。

さらに彼は、法学部の中でも一番厳しいと噂の教授のゼミに入っていた。

「先輩、私なんかとつき合ってる時間はあるんですか？　なんだか、申し訳なくて」

真面目に課題をこなすとすると、時間はいくらでも必要だ。これまで優等生で過ごしてきた樹が、桜とつき合い始めて成績が下がってしまうのは嫌だった。

でも、そんなことは関係ないと樹は首を振る。

「僕は桜と一緒にいたいけど、もしかすると嫌だった？」

「違います！　そんな、嫌だなんて思ったことありません。ただ、邪魔にならないかなって」

「邪魔だなんて、思ったことは一度もないよ。確かに試験の対策はしないといけないけど……」

樹は真摯な瞳で桜を見つめた。ローテールを挟んで座る桜は思わず動きを止める。彼の腕が伸びてきて、朝からがんばってウェーブをつくった髪に触れた。

しばらく頭をゆつくりと撫でられた後で、掠れた声^{くす}が聞こえる。

「近くに行ってもいい？」

「……はい」

樹は立ち上がると、桜の隣に座った。肩が触れ合うほどの距離は初めてだ。

ドクンと心臓が高鳴る。

そっと彼を見上げると、自分よりも大きな手が桜の肩をつかんだ。

「キス、したい」

これまで男性と交際したことがない桜にとって、初めてのことで、しかし彼の部屋に来ることが、何を意味するのかわからない年でもない。

女子校では、もっと過激なことを友達から聞いていた。だから今日は何かあるのかも、と覚悟だけはしていた。

「……はい」

はにかみながらも返事をする、樹の男らしい喉仏が上下する。
桜があつぽつたいまぶたを閉じる。

するとほんの少しだけ触れた彼の唇は、思っていたよりも柔らかい。お互いに緊張していたのか、樹は鳥の羽のように触れただけで顔を離した。

「……嫌じゃなかった？」

近くで見る樹の瞳が揺れている。いつも自信のある彼が、桜の前では戸惑いを隠さないでいる姿に、胸がキュンと高鳴った。

「好き」

「え」

「樹先輩が、好き」

感情のままに声が零れてしまう。

真面目と言われる桜にしてみれば、初めてのことだった。

すると樹は遠慮を失くしたのか、肩から腕を外すと背中に回す。そして柔らかい桜の身体をぎゅつと抱きしめた。

「俺も……好きだ」

普段は僕と言っている彼が、俺と言っている。それだけ感情があふれているのか、樹は抱きしめる腕の力を緩めない。

「桜、かわいい」

二人きりの部屋。

想いを確認し合った二人は自然に唇を重ね始めた。今度は軽くないキスだった。

お互いに着ている服だけの距離でくつつきながらキスをする。

唇を食まれ、裏側を重ね合わせる。くちゅつと音のするキス。それだけで頭の中がぐらぐらと沸騰する。

背中に回されていた樹の腕が、いつのまにか桜の身体の線を撫でていた。それも、とてもいやらしい感じで。でも、嫌な感じは全くなかった。

「んっ……う」

激しい口づけに思わず声が零れる。食べられてしまいそうな勢いと共に、樹の手が人よりも大きめの桜の胸に触れてきた。

「あ……先輩」

されるがままだった桜は、樹の腕をつかんで止める。

といつても彼の手のひらは既に乳房の大きさを堪能しているから、遅いかもれない。開いた目で彼の顔を覗き込むと、瞳の奥が不安げに揺れていた。

「嫌、だった？」

「違うんです。ただ……あの、私」

「ん？」

「……下着が、かわいくないんです」

まさか、今日、ここまで進むと思っていたしなかった。

化粧や髪に気をとられてしまい、花柄のワンピースを選んだところまではよかったけれど、下着のことをすっかり忘れていた。

「白くて、花柄で子どもっぽいから……恥ずかしい」

「ぐっ」

樹は桜を抱きしめたまま、唸り声をあげる。

そのままの姿勢で固まったまま、桜の肩に顔を寄せた。

「……白がいい」

耳元でポソツと樹が呟く。

「え？」

「白がいい。桜の下着姿なら何でもいいけど、僕は白が好きだ」

顔を上げた樹は、目元を真っ赤にしていた。男の人にも色気があると聞いていたけど、正に駄々洩れの状態だ。桜はこれまで感じたことのない疼きでムズムズとしてしまう。

「でも、桜が嫌がることはしたくない。同意なく君に触れることは……これからも、しない」

「あ、でも」

樹に触れられることが嫌なわけではない。交際している以上、いつかはそういった関係になると思っていた。けれど、それが今日だと覚悟していなかったただけだ。

「嫌じゃありません」

そつと上目遣いをして彼を見つめると、樹はドキツとしたのか固まっている。

「でも、私、そうした経験がないから、あの……恥ずかしくて」

「僕もない」

「え？」

聞き間違いだらうか、樹も経験がないと言っている。こんなにもかっこよくて、頭もよくて育ちのいい人が、まさか。

「信じられない」

素直にそのまま口にしてしまう。樹のような人が童貞とは思いましなかった。

「だいたい、勉強しかしていなかったから……仕方がないだろう」

「でも、先輩かっこいいし、女の人も選びたい放題だったんじゃない」

「そんなことはないよ。それに、僕は気持ちがない人と、そうした行為をしたくない」

いかにも真面目な樹らしい。彼は口を引き結ぶと、桜の身体をそつと離す。

「今日は、そういうことをするために桜を家に呼んでない。全く下心がなかったわけじゃないけど」

「……えっと、私も、少しは関係が進んだらいいなって」

「ほんとに？」

「はい。だって、手を握るだけで先輩、何もしてこないから……私、女として魅力ないのかな、とか」「そんなことはない！」

少しだけ卑屈になると、彼は食い気味で否定した。「桜はかわいすぎるくらいかわいい」と言う。

「とにかく、桜は女子校育才だろう？　まずは僕に慣れてくれたらな、とは思っけど。焦るつもりなんてないんだ」

「う、うん」

「だから、ゆっくり進めていこうよ」

「……うん」

ちよっぴり残念に思ってしまうのは、どうしてだろう。そのくらい彼とのキスは気持ちよかった。初めての感覚に、桜も戸惑いつつ返事をする。

その日は結局、桜の頭の中は「ゆっくりって、どのくらいゆっくりなんだろう」と疑問でいっぱいになっていた。

翌週の日曜日。桜は再び、勉強をするために樹の部屋を訪れていた。
でも。

「あ、あっ……んっ、あんっ、先輩っ」

「かわいい、桜っ」

桜が「先輩の寝ている部屋が見たい」と言い、寝室に入ったところでキスが始まった。すると樹は桜をベッドにいざない、「シてもいいっ」と聞いてくる。

桜は桜で、キスをしたのかなと思いい「樹先輩なら、いいですよ」と言った途端、彼のリミッターが消え失せてしまう。

二十一歳になりたての青年は暴走した。

ゆっくりと言っていたのに、全然ゆっくりでないペースで進んでしまう。

「ああっ……っ、あんっ」

「かわいい、もっど声、聞かせて」

気がついた時には、ベッドに横たわり彼がおおい被さっている。驚くけれど、どこかで桜も期待していたから本当は嬉しい。

彼のベッドはシングルサイズより、もう少し大きかった。

二人でもゆうに眠れるサイズに、真新しいシーツがかけられている。

前回来た時は、これよりも小さくて簡易なベッドだったように思うけど、扉の隙間から見ただけだから、そうだったのか自信はない。

まさか、彼が桜とこうなることを期待して新しく購入したなんて……ことはないと思うけれど。

樹と情熱的な口づけを交わしながら、桜はうつとりと見つめてしまう。

唇を重ねるだけでは飽き足らず、彼の肉厚な舌が口内に入り込んできた。歯並びのよい歯列を舐め、頬の内側をなぞり桜の舌を絡めとる。

彼も初めてだと言ったけれど、信じられないくらい巧みで気持ちがいい。

時折口から漏れる息が甘い。桜も甘い声しか出せなくなっていた。

「っ……はあっ……あっ、せんぱいっ」

「名前」

「いつき、せんばいっ」

好きだと思っただけで、気持ちが昂たかってくる。樹の与えてくれる刺激の全てが、桜の官能を高めていた。

互いに着ている服がもどかしい。素肌と素肌でもっと触れ合いたいと、願ってしまう。

「私、おかしいのかなっ」

「ん？」

「先輩ともっと、くっつきたい……っ」

身体に触れていた彼の手が止まる。

桜の上にのしかかったまま、樹ははあつと大きく息を吐いた。

「天然なのかな……俺、どうにかなりそう」

「え？」

「桜がエロすぎてやばい」

すると寝台で膝立ちとなった樹は、着ていたシャツを放り投げる勢いで脱ぎ始めた。

そのままカチャカチャとベルトを外し、ジーンズも脱ぎ捨ててしまう。樹はすぐにボクサーパンツ一枚の下着姿となった。

「桜も……脱がせていい？」

恥ずかしくて顔から火が出そう。これまで慎重に進めていた彼がいきなりアクセル全開になり、戸惑ってしまう。

でも、ここまで嫌だなんて言えない。

覚悟を決めて桜はコクリと頷くと、樹は前開きのワンピースのボタンを外し始めた。心なしか指先が少し震えている。

慣れない手つきながらも、樹は真剣な顔をしていた。桜もドキドキしながら腰を浮かせると、スルツと剥むかれるように柔肌が現れる。

そうして脱いでしまうと、彼に見せるためだけに選んだ白い下着姿となった。

ピンクの花柄のついたブラジャーに、揃いのショーツ。

白くて弾力のある肌が輝いている。それでも恥ずかしくて腕で胸を隠し、もう片方の手でショーツをおおう。

完全には隠せないけれど、気持ちの問題だ。彼の目に、かわいらしく映って欲しいと選んだランジェリーだった。

樹は桜の下着姿を見ただけで興奮したのか、うっと呻うなくと同時に喉仏を上下に動かす。そして黒のボクサーパンツの前の部分が、陰茎の形がしっかりとわかるほど盛り上がった。

「すごくかわいいよ」

恍惚こうごとした表情で樹が声を漏らす。

「でも……」

「大丈夫、恥ずかしがらないで」

樹の声を聞き、桜はふるふると震える腕を開いた。大人になってからは、親にすら下着姿を見せ